

イブン・シーナーにおける生理学と認識障害

小村優太

はじめに

本稿では、イブン・シーナー Ibn Sinā/Avicenna (980–1037) の内的感覚論、そのなかでも共通感覚 (al-hiss al-mushtarak) とそれにかかわる認識障害の問題を取り扱う。そのためにまず、イブン・シーナーに至るまでの内的感覚論の発展史を概観する。中世アラビア語哲学は基本的にアリストテレス Ἀριστοτέλης (BC384–322) 哲学を大きな枠組みとしているが、内的感覚と脳のかかわりは、それと異なった場所で発生し、後にアリストテレス的構図に組み込まれたものである。具体的にはプラトン Πλάτων (BC427–347) を淵源とし、その後ガレノス Γαληνός (c.129–c.200) によって基本的構図が組み立てられる。次に、イブン・シーナーによって展開される内的感覚論を俯瞰し、そこにおける共通感覚の位置付けと、アリストテレス哲学における共通感覚との違いを明らかにする。脳を中心とした内的感覚論の形成がアリストテレス以外のところから出発したこともあり、共通感覚は内的感覚研究史において、しばらく内的諸感覚のリストから姿を消す。それを復活させたのがイブン・シーナーであるが、両者の哲学における共通感覚の役割は異なっている。最後に、イブン・シーナーによる医学書『医学典範』*Qānūn fī al-ṭibb* の記述を参考にしながら、認識論における共通感覚の役割と、そこに損傷が生じたことによって発生する認識障害の関係性に幾ばくかの光を当ててみる。

1. 脳と思考の関係史

まずは、古代ギリシアに端を発する思想史において、脳と思考を結び付ける考え方の歴史を追っていくことにしよう。後期古代からアラビア語哲学において、その哲学的土台とされたのはアリストテレスの哲学体系であるが、脳を中心とする「脳モデル」をアリストテレスと結び付けることはできない⁽¹⁾。脳モデルの源泉をたどってゆくと、プラトンに行きつくことが出来る。

1-1. プラトン『ティマイオス』の脳中心主義

アトランティス伝説でも名高いプラトン『ティマイオス』*Τίμαιος* では彼の宇宙論、自然論、人間論が展開されている。『ティマイオス』は中世アラビア語世

界に極めて大きな影響を与えた。しかしそれは対話篇の形式のまま伝わったのではなく、ガレノスによる敷衍がアラビア語に翻訳されたのである。そこでは以下のような記述を見ることが出来る。

それから彼は言った。やむに已まれぬ必然がないかぎり神的な魂 (al-nafs al-ilāhiyyah) が汚されぬよう、神は頭と胸のあいだに首を置いた。そして死すべき魂 (al-nafs al-mayyitayn)⁽²⁾ のふたつの部分のうち、より優れた方を心臓に置き、より卑しい方を肝臓に置いた。そして両者のあいだに隔壁を置いた。これは横隔膜 (al-hijāb) のことである。そして諸魂のうちで心臓のうちにあるものを、理性的な魂 (al-nafs al-nāṭiqah) に従わせた。⁽³⁾

プラトンはここで人間の魂をみつつに分類している。ひとつは神的な魂、あとのふたつは死すべき魂である。そしてこの神的な魂は頭に宿っており、首によって、下位の魂からの影響をせき止めているのである。さらにこの神的な魂は、頭のなかでも特に脳に宿るという。

それから彼は言った。祝福されるべき至高の神はそのうちに屈曲のないすべすべした三角形 (muthallathāt) から脳 (al-dimāgh) を創造した。彼がここで三角形 (という言葉) によって意味しているのは、彼が先行する箇所で「元素の形——つまり火、土、水、空気のこと——はそれから創造された」と述べたものであることが明らかである。そして諸々の魂のなかでも神的な種 (al-naw‘ al-ilāhī) が住まう⁽⁴⁾ 脳は、脳髓 (mukhkh) とも呼ばれる。⁽⁵⁾

脳に特別重要な価値を認めなかったアリストテレスと違って、プラトンは明らかに脳に特権的な地位を与えている。脳モデルを採用した内的感覚論の土台のひとつである脳中心主義は、プラトン『ティマイオス』に端を発することが分かるだろう。

1-2. ガレノスによる脳のみつつの空腔と内的感覚

『ティマイオス』によって用意された脳中心主義は、ガレノスにおいて脳モデルを採用した内的感覚論として成立する。先にも述べたように、ガレノスはそもそも対話篇だったプラトン『ティマイオス』を論文形式に敷衍しており、中世アラビア語世界にはこれが伝播した (ギリシア語原文は散逸)。プラトンは脳を神的な魂の宿る場所としたが、脳の内部構造についてはとくに詳しく述べていない。ガレノスはこの脳中心主義に加え、脳のみつつの空腔を措定し、そのそれ

それに内的感覚能力を割り当てたのである。『罹患する部分について』 *Περὶ τῶν πεπονηθότων τόπων* でガレノスは脳の機能について述べ、脳のそれぞれの空腔を通る氣息が粘度の高い体液によって詰まり、氣息が上手く循環しなくなることによって癲癇が生じるとする。

以上すべてにより、体液が魂的氣息⁽⁶⁾ (ψυχικόν πνεύμα) の出口を閉塞させると、脳に感受が生じるのが理に適っている。なぜならこの氣息は脳の空腔のなかにあるのだから。『ヒポクラテスとプラトンの学説への覚書』において、なぜこれが魂的氣息と呼ばれているか、そしてその能力 (δύναμις) が何であるかが論証されている。なぜなら我々は解剖から明らかになることに従うのだから、魂それ自体が脳の実体 (σῶμα) のうちに居住しており、そこで理性をはたらかせること (λογίζεσθαι) が生じ、またそこに感覚的諸表象の (αισθητικῶν φαντασιῶν) 記憶が蓄えられるというのが理にかなっているように思われた。一方で、あらゆる感覚的・自由選取的 (αἰσθητικὰς τε καὶ προαιρετικὰς) 活動のための、魂の第一の道具 (ὄργανον) は、脳の空腔のうちの氣息であり、それはとくに後方の空腔においてである [ことも理にかなっているように思われた]。とはいえ、中央の空腔を、それほど支配的ではないものとして無視するべきではないが。というのも、多くの正当な理由が我々をそれへ (πρὸς ταύτην) 導き、同時に [脳の] 前方のふたつ [の空腔] から引き下がるからである。(C. Galenus 1824: 174-175; 英訳 Galen 1976: 87)

また彼は『さまざまに異なった症状について』という作品において、人間の魂のなかで支配的な能力として表象的なもの (φανταστικόν)、思考的なもの (διανοητικόν)、記憶的なもの (μνημονευτικόν) のみつつを挙げている (C. Galenus 1824: 56; 英訳 Johnston 2006: 189)。これは厳密に言えばガレノスが発案したものでなく、すべてアリストテレスに見出せるものである。よって、これをもってガレノスがみつつの内的感覚を作り上げたと言うことは出来ないかもしれない⁽⁷⁾。とはいえ、脳のみつつの空腔と、表象力、思考力、記憶力のみつつの能力は、それ以降のアラビア語哲学における基本構造のひとつとなってゆく。

1-3. アラビア語哲学におけるガレノスモデルの継承

アッバース朝支配下でアラビア語世界は空前の繁栄を享受した。西方ラテン語世界では失われたギリシア語作品をアラビア語に翻訳しようという国家プロジェクトは、アッバース朝の強大な支配力あってこそとも言える⁽⁸⁾。アリストテレスを中心としたギリシアの哲学作品は数多くがアラビア語に翻訳され、10世紀半ばまでには大半のアリストテレス作品のきわめて精度の高い翻訳がアラビア語で利

用可能になる。この翻訳プロジェクトの中心にいた翻訳家のひとりが、フナイン・イブン・イスハーク Ḥunayn ibn Ishāq (809–873) である。彼はガレノスの著作を数多くアラビア語に翻訳し、『罹患した部分について』もフナインの手によってアラビア語訳されたことが分かっている⁽⁹⁾。医学者でもあったフナインは自らの医学書も残しており、そのなかのひとつ『目にかんする10章の書』*Kitāb al-‘ashr maqālāt fī al-‘ayn* はガレノスの脳モデルを忠実に再現している。

統括能力⁽¹⁰⁾ (al-siyāsah) について言えば、[脳が、ほかの器官を使用することなく] 自らで [統括能力の] 活動をおこなうのであり、統括能力はみつつの事物を含む。[そのみつつとは] 表象力 (al-takhayyul) と思考力 (al-fikr) と記憶力 (al-dhikr) である。そして表象力は脳の前方にあり、思考力はその中央に、記憶力はその後方にある。

また脳のなかには、よつつの容器 (aw‘iyah) があり、それは脳の空腔 (butūn) として知られている。そして脳の前方にはふたつの容器があり、その後方にはひとつの容器がある。そして前方のふたつの容器と後方のひとつの容器のあいだにひとつの容器がある。そしてこれら容器のなかに魂的氣息 (rūḥ nafsanī) があり、それによって我々が述べたこれらの活動があり、[これらの活動が] その氣息を欠くことはない。またこの魂的氣息は、心臓のうちに生じる動物的氣息⁽¹¹⁾ (al-rūḥ al-ḥayawānī) から生じる (Meyerhof 1928: 86)。

脳のみつつの空腔と、そこに宿る表象力、思考力、記憶力というみつつの能力という構図はガレノスのものを踏襲しているが、ガレノスにおいてはそれほど明白にされていなかった、それぞれの空腔と能力の対応関係が明示されている。フナインによってより明確にされたガレノスモデルは、その後もアブー・バクル・ラージー Abū Bakr al-Rāzī (854–925) や純正兄弟団 Ikhwān al-Ṣafā’ (10世紀前後) などに受け継がれてゆき、内的感覚論のひとつの重要なモデルとなる。

1-4. イブン・シーナーによる内的感覚論

以上のような脳を中心としたガレノスモデルをイブン・シーナーも基本的には踏襲しており、とりわけ彼が17歳のときに書いたとされる最初の哲学作品『魂論摘要』*Mabḥath ‘an al-quwā al-nafsanīyah* はそれ以前の内的感覚論とのつながりを多く見出すことが出来る。『魂論摘要』の第7章は全体が内的感覚の説明に充てられている。以下は第7章の全文である。

外的諸感覚のいかなるものも、色や匂いや柔らかさ [といった種類の異なる感覚的] 認識を統合しない。しかししばしば我々は黄色い物体を見つけ、それを味わったり、

嗅いだり、触ったりしないのに、それが甘く、香りの良い、液体の蜂蜜であると認識したりする。そこで明らかになるのは、我々のもとには、そこに「これら」四感覚の認識が集合し、それらの総体がひとつの形相のもとに現れるようなひとつの能力があるということである。もしそういった能力がなければ、我々は甘さが例えば黒さではないということを知ることは決してないだろう。というのも両者を区別するものは、両者（＝甘さと黒さ）の両方を知るものなのだから。この能力は共通感覚（al-hiss al-mushtarak）や形相把握力（al-mutaṣawwirah）⁽¹²⁾として特徴付けられる。もしこれが外的諸感覚の一種であれば、その支配は覚醒状態だけに限られてしまうが、観察結果はこれと逆を証明している。つまりこの能力は、睡眠と覚醒の状態両方において活動することもあるのである。

それから動物のうちには、形相が共通感覚から消滅することなく、共通感覚に集まった形相を組み合わせたり分離したり、差異を記録したりする能力がある。この能力は形相把握能力（al-quwwah al-muṣawwirah）ではあり得ない。というのも形相把握能力のうちには感覚によって得られた正しい形相しかないからである。一方この能力では事柄はこれと逆のこともあり、間違いや嘘、または感覚からはその形が取得されないものを把握することもあり得るだろう。この能力は表象力（al-mutakhayyilah）と呼ばれる。

それから動物のうちには、ある事物が斯く斯くであるとか、斯く斯くでないとかを意志決定によって判別する能力があり、この能力によって動物は危険を回避し、望ましいものへと向かう。この能力が形相把握力（al-quwwah al-muṣawwirah）ではないことは明らかである⁽¹³⁾。つまり形相把握力は、感覚から取得したものに従って太陽の円盤の大きさを把握するが、この能力では事柄はこれと逆である。それと同様に、猛獣が遠くに小鳥ほどの大きさの獲物を発見すると、獲物の像や大きさが猛獣にとって不明瞭でなく、獲物に向かっていく。よってこの能力は表象力でもないことが明らかである。つまり表象能力は、事柄が表象能力の把握に従っているのだと確信せずに活動するのである。そしてこの能力は判断力（al-mutawahhimah）、または意見（al-zānnah）と呼ばれる。

それから動物のうちには、例えば狼は敵であり、子供は愛すべき親族であるといったような、感覚によって認識された意味（maʿānī）を保持しておく能力がある。この能力が形相把握力と違うのは明らかである。つまり、諸感覚によって獲得された形相以外は形相把握力のうちにはないのである。それから諸感覚は狼の敵対性や子供の可愛さではなく、狼の姿や子供の外見を感覚するのである。可愛さや危険性を獲得するのは、判断力（al-wahm）だけであり、それから両者（＝可愛さや危険性）をこの能力に貯蔵する。またこの能力が表象力ではないのは明らかである。つまり表象力は、判断力が認可したり真と見做したり諸感覚から推察したもの以外を表象し得る

のである。一方でこの能力は判断力が認可したり真と見做したり諸感覚から推察したものしか把握 (*tataṣawwaru*) しない。またこの能力は判断力でない。なぜなら判断力は、他のものが真と見做したものを保持するのではなく、むしろ判断力自体で真と見做すのだから。一方この能力は、自らが真と見做すのではなく、他のものが真と見做したものを保持するのである。この能力は保持能力 (*al-hāfīzah*)、または記憶力 (*al-mutadhakkirah*) と呼ばれる。そして表象能力は、判断力が単独で使用すると、この名前、つまり表象能力と呼ばれる。そして理性的能力 (*al-quwwah al-nāṭiqah*) が使用すると、思考能力 (*al-quwwah al-mufakkirah*) と呼ばれる。

また、哲学者アリストテレスによれば、心臓はあらゆる能力の源であるが、それらの支配 (*sulṭān*) は様々に異なった道具のうちにある。外的諸感覚の支配は、すでに知られた〔身体的な〕道具のうちにある。形相把握能力の支配は、脳の前方の空腔のうちにある。表象能力の支配領域は、(脳の) 中間の空腔のうちにある。

記憶能力の支配は脳の後方の空腔のうちにある。判断力の支配は脳全体、そのなかでも特に表象の領野のうちにある。そして空腔が受けた傷〔の箇所〕に応じて、これら諸能力の活動は影響を被る。もし〔これらの能力が〕自体的に存立し、自体的に活動するのならば、その諸活動の特性において、いかなる道具も必要としないことになるだろう。ここから我々が知るのは、あとで明らかにするように、これら諸能力が自体的に存立せず、むしろ不死の能力とは理性的魂のことだ、ということである。もっとも〔この理性的魂は〕それ自体のためにこれら諸能力の精髓を何らかの形で抽出し、それ (= 理性的魂) 自体によって諸能力を生じさせ得るのだが。そしてこれにかんする証明は近々到来するだろう。至高にして唯一なる神がお望みになれば (*Ibn Sīnā* 2007[1952]: 166–167)。

イブン・シーナーはここで脳の空腔をみつつに分けており、ガレノスモデルを踏襲していると言うことが出来るが、判断力または意見と呼ばれる能力は脳の全体を使用するとしており、早くもガレノスモデルからの逸脱が見出される。またイブン・シーナーはここで共通感覚という能力を内的感覚に導入しており、アリストテレス以降長いあいだ顧みられることの少なかった共通感覚という能力を再び内的感覚の枠組みの中に復活させたのである (*Wolfson* 1935: 95)。イブン・シーナーの内的感覚論はその後も発展を続け、中期作品である『始原と帰還』*al-Mabda' wa-l-ma'ād* で大枠が決まり、『人間の魂の諸状態』*Aḥwāl fī al-naḥs al-insāniyyah* において、『治癒の書』*al-Kitāb al-Shifā'* などで論じられ、その後ラテン語にも翻訳された「イブン・シーナーの内的感覚論」が完成することになる。しかし本稿では、『魂論摘要』の内的感覚論の構図を見てみることにしよう。

	前方の空腔	中央の空腔	後方の空腔	脳全体
ガレノスの系譜 ⁽¹⁴⁾	表象力 (al-takhayyul)	思考力 (al-fikr)	記憶力 (al-dhikr)	(なし)
イブン・シーナー	共通感覚 (al-hiss al-mushtarak) もしくは 形相把握力 (al-muṣawwirah)	表象力 ⁽¹⁵⁾ (al-mutakhayyilah) または 思考力 (al-mufakkirah)	保持力 (al-hāfiẓah) もしくは 記憶力 (al-mutadhakkirah)	判断力 (al-mutawahhima) もしくは 意見 (al-zānnah)

2. アリストテレスとイブン・シーナーにおける共通感覚

イブン・シーナーがガレノ斯的内的感覚論を踏襲しながら、そこに組み込んできた「共通感覚」と呼ばれる能力について語るとき、注意が必要である。もちろんそれはアリストテレスによって論じられた共通感覚が基になっている。イブン・シーナーが『魂論摘要』で述べる、「色や匂いや柔らかさ [といった種類の異なる感覚的] 認識を統合」し、これらの外的な情報の「総体がひとつの形相のもとに現れるような」能力は、アリストテレスが『魂について』 *Περί Ψυχής* で「感覚は、それ以外の感覚に固有のものを付带的に認識することがあるかもしれないが、それは諸感覚が集まった状態で [認識するのでは] ない。むしろそれは、ふたつのものがひとつのものの中に集まったとき、ひとつの感覚のうちでそうなるのである⁽¹⁶⁾」と言うところのひとつのもの、つまり共通感覚の説明に合致する。とはいえ、アリストテレスとイブン・シーナーの共通感覚は基本的に異なった能力であると考えた方が良い部分も多い。アリストテレスが『魂について』第3巻冒頭で述べる共通感覚は、視覚や聴覚、味覚、嗅覚、触覚といった五感にまたがって感受されるものを認識する。アリストテレスによれば、ひとつの感覚はひとつの対象を取り扱う。視覚は目に見えるもの、聴覚は耳に聞こえる音、味覚は舌に感じる味、のように。しかし「大きさ」や「運動」や「数」といったものは単一の感覚に限定されていない。我々は視覚で「大きな木」を見ることもあれば、聴覚で「大きなラッパの音」を聞くこともある。「ひとつのボール」を見ることも出来れば、同時にそのボールを触って、「ひとつのボール」を触知することも出来る。アリストテレスの共通感覚が「共通」たる所以は、五感のそれぞれに共通した対象を認識するからである。しかしイブン・シーナーにおいては、共通感覚のこういった側面は抜け落ちてしまっている。イブン・シーナーにとっての共通感覚は、「黄色」く「甘」く「香りの良」い「液体」というバラバラの情報を統合して、自分がいま認識している対象が蜂蜜であることを知る能力である。五感にまたがるバラバラの情報を統合するという、この共通感覚のはた

らきは、アリストテレスによっても指摘されている。とはいえ、アリストテレスはふたつ以上の情報を、ひとつの情報にほかの情報が付帯した形で認識することを共通感覚のはたらきとしており、むしろこのせいで我々は黄色い液体を胆汁と勘違いしてしまうと述べている。イブン・シーナーによれば、外部から認識された様々な感覚的形相はまず一旦共通感覚に集積され、そこで統合される。このようにして共通感覚において処理された様々な情報を、脳のより後部に位置する表象力や思考力や判断力を取り扱うのである。

3. 共通感覚と精神障害

脳を動物の認識活動の中心とする見方はイブン・シーナーの哲学的作品だけでなく、医学的作品においても共通している。『医学典範』第3巻における脳の病気にかんする部分では、脳のみつつの空腔のモデルをそのまま使用している。

脳には縦に長いみつつの空腔が存在する。とはいえそれぞれの空腔は横方向にふたつの部分であるのだが。よって〔脳の〕前部は、左右ふたつの部分に分離されているのが感知できる。この部分は呼吸を補助し、くしゃみによる老废物 (al-faql) の排出を補助し、多くの感覚的氣息 (al-rūh al-hassās) の配分を補助し、内的な認識の諸能力のうち、形相保持 (al-muṣawwirah) 諸能力のはたらきを補助するのである。

脳の後部の空腔について言えば、これも〔ほかのふたつの空腔のように〕巨大 (‘aẓīm) である。なぜならそれは、巨大な器官の空腔を埋め尽くしているのだから。またそれは、巨大なもの——つまり脊髄 (al-nukhā‘) ——の始原であり、運動を引き起こす氣息 (al-rūh al-muḥarrik) のほとんどはそこから配分される。そこには記憶力のはたらきがある。しかしそれ (= 後部の空腔) は前部より、いやむしろ前部のふたつの空腔それぞれよりも小さい。段々と大きい状態から小さくなってゆく。それは脊髄に向かうにつれ小さくなってゆき、密度が増して行き、固くなる。

真ん中の空腔について言えば、この空腔は前部と後部の通気口 (nafadh) や、ふたつのあいだに定められた回廊 (dihlīz) のようなものである。そのため、これは巨大であり、また横に広い。なぜならそれは巨大なもの (= 脳の前部) から巨大なもの (= 脳の後部) へと至っているのであり、それによって前部の氣息と後部の氣息がつながるのだから。想起されたものの形状 (al-ashbāh) もここに導かれる。この真ん中の空腔には屋根がかけられ、弓状の内部の球が屋根になっており、その名前と呼ばれる。そのために、それは通路となっているのだ。それは損傷からも守られており、何重にもなった覆いの圧力に耐えるだけの強さがある。脳の前部のふたつの空腔はそこに集積し、この通路を通して後部にまで現れるのである。この場所はふたつの空腔の集積所と呼ばれ、この通路そのものが空腔である。これは形相化能力 (al-taṣawwur)

から記憶力 (al-hafz) へと至るのだから、あなたが知るところに即して言えば、思考力 (al-fikr) と表象力 (al-takhayyul) にもっとも適した場所である。以上のことから、これらの空腔は、その空腔からこれらのはたらきが発生する諸能力の場所であり、そこに損傷が生じれば、それぞれの部分の損傷に応じて、その能力が消失するのである。(Ibn Sīnā, *Qānūn fī al-ṭibb*: 4; 英訳 Avicenna 2014: 4-5)

脳のそれぞれの箇所の空腔に能力が割り当てられているのは哲学作品における構図と同じであるが、ここでは前部の空腔と中部の空腔、後部の空腔それぞれの関係性も詳しく説明されている。呼吸を補助したり、くしゃみによって老廃物を排出したりする機能があるとはいえ、脳の前部の空腔のはたらきは、主に感覚的氣息の差配と、形相保持能力の補助である。中期作品以降、形相保持能力と共通感覚は別の能力とされたが、『魂論摘要』においてイブン・シーナーは両者と同一の能力と考えていた。感覚能力と深く結びついた脳の前部から氣息が脳の後部に流れ込むと、ここに記憶が蓄えられ、脳自体は脊髄へとつながってゆく。前部で感覚情報を取り扱い、後部でそれらの記憶を行うため、両者の橋渡しとして中部の空腔が存在し、両者のはたらきに隣接しているからこそ、脳の中部は思考力や表象力といった、認識能力のなかでもっとも高度な能力を司ることになる。脳の機能が健全に保たれるためには、この氣息の流れをスムーズに保つことが重要で、氣息が詰まってしまうと様々な障害が引き起こされるという考えは、ガレノスのものを引き継いでいると言える。そして、脳の対応する部分が損傷することによって、それに対応した能力が損なわれる。精神障害 (āfāt al-dhihn) の概要について、イブン・シーナーは以下のように述べている。

脳の諸活動に生じる損傷の種類には、ふたつの原因があり、それは三通りに知られる。

人間の感覚が健全で、覚醒時も睡眠時も事物の形状を健全に表象し、それから覚醒時や睡眠時に見た表現可能な諸事物や諸状態が、彼のもとから消えてしまっていたり、また彼がそれらを聞いたり見たりしても、彼のもとに留まることがなかった場合、それは記憶力や脳の後部の損傷を伴っている。

もし睡眠時や覚醒時に生じる事物に問題がなく、患者が眠り病を患っておらず、言うべきでないことを言って、そうすべきでないことを望んだり受け入れたりして、望むべきでないことを望み、見たものを想起することが出来ず、それらを繰り返すことが出来ない場合。これは、彼の思考力が損傷していることの表れである。この損料は脳の中部へのものである。

彼の記憶力と会話が普段通りで、彼の言動に適正なもの正反対が生じておらず、

感覚可能なものを表象するが、誤った人物や、誤った火や水などを見たり、それが睡眠時や覚醒時における弱々しい事物の形状の表象だったりするとき、損傷は想像力 (*al-khayāl*) や脳の前方の空腔へのものである。

そして、これらのうちのふたつまたはみつつが集まっている場合、損傷はふたつまたはみつつである。そして、すでに記憶力に生じた損傷に伴って、思考力に痲痺が生じ病気になるのは、思考力が病気になるって、それから記憶力が病気になるのよりも [治療するのが] 容易である。(Ibn Sīnā, *Qānūn fi al-tibb*: 59–60; 英訳118–119)

ここでの記述からも分かるように、脳の後部に障害が生じた場合、主に記憶障害が生じる。この場合、認識能力は健全でありそれを正確に判断することが出来るのだが、それを記憶に留めておくことが出来なくなる。また脳の中部に障害が生じた場合、判断力や思考力に障害が生じる。この場合も、患者の認識能力に問題はなく、また知覚した情報を記憶することも出来るが、認識した物事について、すべきこととするべきでないこと、言うべきことと言うべきでないことの判断をおこなうことが出来なくなる。最後に、脳の前部に障害が生じた場合、認識障害が生じる。この場合、認識した対象について正確な判断を下すことが出来、それを記憶しておくことも出来るのだが、そもそもの認識自体が歪められてしまい、実際には存在しないものを見たり聞いたりすることになる。イブン・シーナーは個々の精神障害として精神錯乱や譫妄、無分別や愚鈍といった症状を取り扱っているが、これらは基本的に脳の中部、つまり思考力に関係した障害とされている。共通感覚は脳の前部に宿る能力であり、外的な感覚認識を統括するはたらきももつため、幻覚や幻聴といった症状と深くつながることになる。また先にも述べたように、共通感覚はそれぞれ別個の感覚情報を統合することによってひとつの対象を総合的に認識する能力でもあるため、共通感覚が損傷するということは、蜂蜜を認識するときに、それを「蜂蜜」として認識することが出来ず、「黄色いもの」「甘いもの」「香りの良いもの」「液体のもの」として、バラバラの情報のまま感受されるということでもあるだろう。イブン・シーナーによれば、人間にとってもっとも重要なのは思考力や判断力であり、精神障害の多くはこれらの能力の損傷によって引き起こされるという。しかし、人間の認識活動は脳の前部から中部を通して後部へと流れる氣息のはたらきによって引き起こされるため、この氣息の流れのもっとも「入口」に近い共通感覚の損傷は、思われる以上に深刻な症状を引き起こすのではないだろうか。何しろ、ありもしないものを見たり聞いたり、また存在するものを上手く見たり聞いたり出来ないようでは、それを土台とした思考や判断もあやふやなものになってしまうだろうから。

注

- (1) アリストテレスは脳の機能を、心臓で温められた血液を冷やして体温を調整することであると考えていた (Aristotle 1998[1937]: 148–156)。
- (2) *Mayyit* は本来「死すべき」でなく「死んでいる」。『ティマイオス』では「魂の死すべき種 (τὸ τῆς ψυχῆς θνητὸν γένος)」に対応か (Plato 1978: 69e4)。
- (3) Galenus 1951, *Pars Arabica*: 23. ギリシア語原文の69d6–70a2にはほぼ対応する (Plato 1978: 69d6–70a2)、和訳 (プラトン 1975: 128)。
- (4) MS *Ayasofya* 2410では *yaslubu-hu* となっているが、Kraus と Walzer による読み方、*yaskunu-hu* に従った (Jālinūs, p. 13r)。
- (5) Galenus 1951, *Pars Arabica*: 24. ギリシア語原文の73b5–73d2にはほぼ対応する、和訳 135–136。
- (6) 一般的にはラテン語の *spiritus animalis* を基に「動物精気」などと翻訳されることが多いが、ここではギリシア語の原義のままの訳語にした。
- (7) Wolfson はこれらみっつの要素はすべてアリストテレスに見出されるものであるということで、この内的感覚の三分割もアリストテレスに遡るものであるとしている (Wolfson 1935: 72)。
- (8) 一般に広く知られている「知恵の館 (*bayt al-hikmah*)」が、これらの翻訳活動に与えた影響は、Gutas によって疑問視されている。彼によれば「知恵の館」は実在していただろうが、おそらくそれは言われるほど重要なものではなく、しかもペルシア語からアラビア語への翻訳を行う機関であったという (Gutas 1999[1998]: 53–60)。
- (9) 当時流通していた書物の目録『フィフリスト』*al-Fihrist* によるとガレノスの著作の多くはアラビア語訳されており、更にフナインはアリー・イブン・ヤフヤー ‘Alī ibn Yahyā への手紙のなかで、『内的諸器官の病気の解明について』*Fī ta’arruf ‘ilal al-a’qā’ al-bā’inah* について述べ (『罹患した部分』の別名)、それはレーシュアイナーのセルギウス *Sirjis/Sergius of Reshaina* (536歿) がシリア語に酷い翻訳を行ったが、フナイン自身が後に二度シリア語に翻訳し直し、その後イスハーク・イブン・スライマーン *Ishāq bn Sulaymān* (イサク・イスラエリ *Isaac Israeli ben Solomon* (832頃–932頃) のことか?) のためにアラビア語に翻訳したと述べている (Hunain Ibn Ishāq 1925: Arabic 11–12)。つまり上で論じたガレノス著作のうち、少なくとも『罹患した部分』については、フナインによるアラビア語訳が存在していたはずである。
- (10) 校訂者である Meyerhof は「思考のはたらき (the act of thinking)」と翻訳しており (Meyerhof 1928: 17 (translation))、ギリシア語の「*ψυχὴ λογιστικὴ*」に対応するものとしている (Meyerhof 1928: 190 (translation))。
- (11) ガレノスは心臓で動物的な氣息が発生すると言っていない。May はガレノスの氣息理論の概説をおこなっており、それによると、心臓から生命的氣息が発生し、それが脳に到達すると魂的氣息になるという (Galen 1968: 46–47)。この生命的氣息の「生命的」は原語が *τὸ ζωτικὸν* である (Galenus 1822: 700)。この形容詞は字義通りには「生命を維持する」、「生命に満ち溢れた」という意味であるが、類語である「動物 (*τὸ ζῷον*)」からの連想で「動物的氣息」と訳したのかもしれない。
- (12) ここで述べられている *mutaṣawwīrah* と、「形相把握力 (*muṣawwīrah*)」は厳密に言え

ば違う用語である。mutaṣawwīrah は ṣ-w-r の五形の能動分詞、muṣawwīrah は二形の能動分詞である。但し wahm と tawahhum など、同語根で異なる派生形の名詞が同じ意味で使用されることはままたり、この場合も同じ「形相把握力」を指しているのだと考えられる。Landauer は両者を共に Vorstellungsverögen と訳している (Landauer 1875: 400)。

- (13) Landauer はこの「形相保持力 (al-mutaṣawwīrah)」を「共通感覚 (Gemeinsinn)」と訳している (Landauer 1875: 401)。
- (14) ここに例示したアラビア語の用語はフナイン、ラージー、純正兄弟団に共通のものである。
- (15) イブン・シーナーの表象力 (takhayyul/al-quwwah al-mutakhayyilah) とアリストテレスの表象力 (φαντασία) を単純に比較することは出来ない。アリストテレスにおける表象力はいまだ未分化であり、人間の感覚認識と知性的認識のあいだにある多様な認識を取り扱う。一方でイブン・シーナーの表象力はテミスティオス Θεμιστιος (317–390頃) からファーラービー Abū Naṣr al-Fārābī (872頃–950/1) を経由して入ってきたもので、犬と人間の形相を組み合わせて夫人間の形相を思い浮かべたりするものであり、むしろ「構想力」とでも言うべき能力である。英語では compositive imaginative faculty と訳されることもある (Davidson 1992: 95)。
- (16) Aristotle 1954: 64. 上記引用文はアリストテレス『魂について』の中世アラビア語版をもとにしたものである。ギリシア語原文では Aristotle 1956: 425a30–425b2に対応。

文献

- Aristoteles (1956). *De Anima*. (W. D. Ross, Ed.) Oxford, New York: Oxford University Press. アリストテレス『魂について』(中畑正志訳) 京都大学学術出版会, 2001年.
- Aristotle (1998[1937]). *Parts of Animals*. In Aristotle, *Parts of Animals, Movement of Animals, Progression of Animals* (A. L. Peck, Trans.). Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Aristotle (1954). *Fi al-nafs*. In Aristotle and ḥ. Badawī (Ed.), *Fī al-naḥs*. Cairo: Maktabah al-nahḍah al-miṣriyyah.
- Avicenna (2014). *The Canon of Medicine* (Vol. 3). (L. Bakhtiar, Ed., & P. A. Sardo, Trans.) Chicago: Kazi Publications.
- Davidson, H. A. (1992). *Alfarabi, Avicenna, & Averroes, on Intellect*. New York, Oxford: Oxford University Press.
- Galen (1968). *On the Usefulness of the Parts of the Body* (2 Vols.). (M. T. May, Trans.) Ithaca, New York: Cornell University Press.
- Galen (1976). *On the Affected Parts*. (R. E. Siegel, Trans.) Basel, München, Paris, London, New York, Sydney: S. Karger.
- Galenus (1951). *Compendium Timaei Platonis*. (P. Kraus, & R. Walzer, Eds.) London: Aedibus Instituti Warburgiani.
- Galenus, C. (1822). *De Usu Partium*. In Galenus, C. and Kühn, C. G. (Ed.), *Opera Omnia* (Vol. 3).

- Leipzig: Officia Libraria Car. Cnoblochii.
- Galenus, C. (1824). De Locis Affectis. In Galenus, C. and Kühn, C. G. (Ed.), *Opera Omnia* (Vol. 8). Leipzig: Officina Libraria Car. Cnoblochii.
- Gutas, D. (1999[1998]). *Greek Thought, Arabic Culture*. New York: Routledge.
- Hunain Ibn Ishāq (1925). Über Die Syrischen und Arabischen Galen-Übersetzungen. (G. Bergstässer, Hrsg.) *Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, XVII*(2).
- Ibn Sīnā (2007[1952]). Mabḥath ‘an al-quwā al-nafsāniyyah. In Ibn Sīnā and Ahwānī, A. F. (Ed.), *Aḥwāl al-nafs*. Paris: Dar BYBLION.
- Ibn Sīnā (n.d.). *Qānūn fī al-ṭibb*. Cairo: Al-muthanna Library.
- Jālīnūs (n.d.). *Kitāb aflāṭūn al-musammā bi-ṭīmāws*. MS Ayasofya 2410.
- Johnston, I. (2006). *Galen: On Diseases and Symptoms*. (I. Johnston, Trans.) Cambridge: Cambridge University Press.
- Landauer, S. (1875). Die Psychologie des Ibn Sīnā. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*(29), 335-418.
- Meyerhof, M. (1928). *The Book of the Ten Treatises on the Eye Ascribed to Hunain Ibn Is-hāq*. Cairo: Government Press.
- Plato (1978). Timaeus. In Plato and Burnet, I. (Ed.), *Opera* (Vol. 4). Oxford: Oxford University Press. プラトン『ティマイオス』(種山恭子訳)岩波書店, 1975年.
- Wolfson, H. A. (1935). The Internal Senses in Latin, Arabic, and Hebrew Philosophic Texts. *Harvard Theological Review, XXVIII*(2), 69-133.